2023年 6月 19日

協伸商会穀物レポート［KKR］Vol. 059

（2023/24年度　USDA米国農務省 6月9日発表）

［ハイライト］

① 今年度の世界穀物生産見通しは一部乾燥地域はあるが相変わらず順調、価格は当面の底値を探る展開か…

USDA発表では今年度生産見通しは、小麦８億ﾄﾝ超/コーン12億ﾄﾝ台回復/コメ5.2億ﾄﾝ/大豆4.1億ﾄﾝと軒並み好調。この結果穀物全体では28.3億ﾄﾝ/大豆を加えて32.4億ﾄﾝと史上最高となった。また穀物貿易量は初めて５億ﾄﾝを突破、大豆を含めて6.7億ﾄﾝと３大バルクカーゴの中での存在感が高まって来ている。一方、市場価格は下記の通り軒並み下落し昨年のロシアのUKR侵攻以前に戻っているが、世界的天候異変/港湾スト等による物流混乱/黒海回廊問題等、波乱要因はこれからである。

② ブラジルの生産拡大は止まらず、遂に大豆/コーンの輸出量は米国を凌駕する勢い

上記の世界穀物生産拡大を牽引しているのはブラジルであり、遂に大豆/コーン輸出量は米国を凌駕する勢いである。具体的には大豆生産/輸出量は、BRA163/97vs米国123/54百万ﾄﾝ、同じくコーンはBRA129/55vs米国388/53 百万ﾄﾝとコーン生産量は米国が圧倒的であるが、輸出は両穀物ともBRAが上回り合計1.5億ﾄﾝと米国1.1億ﾄﾝを大きく上回ることは確実な状況である。今後ともBRAの生産輸出拡大は続くものと思われ、世界穀物輸出市場は今後この二カ国がせめぎ合う展開が続く。

③ ロシアの小麦生産/輸出見通しは今年も順調、一方戦時下のUKRの穀物生産/輸出は侵攻前の６割程度まで減少

昨年度のロシアの小麦生産/輸出は92/45百万ﾄﾝと史上最高数量を記録、特に輸出量は前年比35%増/世界シェアは最高の21%を記録したが、今年は生産量は若干減少し85、輸出は更に拡大し47百万ﾄﾝ見通しと好調。一方、UKRは小麦生産/輸出が18/11、コーンが25/19百万ﾄﾝと昨年より更に大きく減少が予測され、ロシア侵攻前の小麦33/19 、コーン42/27百万ﾄﾝ比で見ると、小麦/コーン生産は57 %、輸出は65%程度まで落ち込んでいる。この回復にはロシアの排除が不可欠である。

１、世界穀物需給の概要

① **生産量：** 2,834百万ﾄﾝ（ 前年比3.3%　増↑ 、前月比0.5%　増↑ ）
② **消費量：** 2,818百万ﾄﾝ（ 前年比1.8%　増↑ 、前月比0.3%　増↑ ）
③ **貿易量：** 506百万ﾄﾝ（ 前年比4.0%　増↑ 、前月比1.2%　増↑ ）

2、小　麦

① **生産量：** 800百万ﾄﾝ（ 前年比1.5%　増↑ 、前月比1.3%　増↑ ）
② **消費量：** 796百万ﾄﾝ（ 前年比0.4%　増↑ 、前月比0.6%　増↑ ）
③ **輸出量：** 213百万ﾄﾝ（ 前年比1.4%　減↓ 、前月比1.4%　増↑ ）
⑤ **在庫量：** 271百万ﾄﾝ（ 前年比1.5%　増↑ 、前月比2.4%　増↑ ）　/（在庫率 34%）うち中国140百万ﾄﾝ、占有率52%
④ **価　格：** $6.19/Bu　（前年$10.40/Bu　/　前月$6.47/Bu）　と前月比$0.28　下落。
⑤ **概　況：** 世界の小麦生産見通しはついに８億ﾄﾝの大台に乗せた！これは史上初、画期的。要するに小麦が世界の主食としてその座を不動のものとした感が強い。需要の伸びもそれに付随している。世界在庫量は生産量が在庫を上回った為2.7億ﾄﾝまで増加。

3、とうもろこし

① **生産量：** 1,223百万ﾄﾝ（ 前年比6.3%　増↑ 、前月比0.3%　増↑ ）
② **消費量：** 1,206百万ﾄﾝ（ 前年比3.7%　増↑ 、前月比0.2%　増↑ ）
③ **輸出量：** 198百万ﾄﾝ（ 前年比12.0%　増↑ 、前月比1.3%　増↑ ）
④ **在庫量：** 314百万ﾄﾝ（ 前年比5.5%　増↑ 、前月比0.3%　増↑ ）　/（在庫率 26%）うち中国204百万ﾄﾝ、占有率65%
⑤ **価　格：** $6.09/Bu　（前年$7.27/Bu　/　前月$6.53/Bu）　と前月比$0.44　下落。
⑥ **概　況：** 世界生産量は、米国/ARG/EU等の生産が回復したこと等から前年から6.3%約８千万ﾄﾝ増見通しで好調。消費量も米国/中国で増加し12億ﾄﾝを超える見通し。輸出量は昨年比5.5%約27百万ﾄﾝ増加し２億ﾄﾝに近づき一昨年レベルまで復調の見通し。在庫量は生産が消費を上回ることから３億ﾄﾝを超え、市場価格を押し下げているが６ﾄﾞﾙ前後で踏みとどまっている。

４、大　豆

① **生産量：** 411百万ﾄﾝ（ 前年比11.1%　増↑ 、前月比0.0%　→ ）
② **消費量：** 386百万ﾄﾝ（ 前年比6.1%　増↑ 、前月比0.1%　減↓ ）
③ **輸出量：** 172百万ﾄﾝ（ 前年比2.3%　増↑ 、前月比0.0%　→ ）
④ **在庫量：** 123百万ﾄﾝ（ 前年比21.7%　増↑ 、前月比0.7%　増↑ ）　/（在庫率 32%）うちBRA41/ARG24百万ﾄﾝ
⑤ **価　格：** $13.53/Bu　（前年$16.98/Bu　/　前月$14.69/Bu）　と前月比$1.16　下落。
⑥ **概　況：** 世界生産量は、米国/ARGの生産が回復しBRAも好調なことから前年比11%約41百万ﾄﾝ増加し、遂に４億ﾄﾝの大台を突破し史上最高見通しである。輸出量は４百万ﾄﾝ増だが消費量同様に生産拡大には及ばず在庫量が1.2億ﾄﾝと大幅に拡大する見通し。

以上

世界の穀物・大豆等の需給

2023年6月9日
米国農務省発表：　単位１００万トン

主要穀物世界の需給							
			生産量	総供給量	貿易量	総使用量	期末在庫量
全穀物	2020/21		2,799	3,593	513	2,802	790
	2021/22		2,744	3,534	487	2,769	765
	2022/23	5月	2,820	3,580	500	2,810	770
	2023/24	6月	2,834	3,599	506	2,818	781
小麦	2020/21		780	1,063	203	793	271
	2021/22		789	1,059	216	793	267
	2022/23	5月	790	1,056	210	792	264
	2023/24	6月	800	1,067	213	796	271
粗粒穀物（とうもろこし等）　注１	2020/21		1,505	1,828	254	1,491	337
	2021/22		1,443	1,780	216	1,455	325
	2022/23	5月	1,510	1,834	235	1,495	339
	2023/24	6月	1,513	1,838	238	1,498	340
米	2020/21		514	701	57	519	182
	2021/22		513	695	55	521	173
	2022/23	5月	521	690	56	523	167
	2023/24	6月	520	694	56	524	170
大豆	2020/21		360	460	154	361	99
	2021/22		370	468	168	367	101
	2022/23	5月	411	512	172	386	125
	2023/24	6月	411	512	172	386	126

世界のとうもろこし需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	5月	297.41	1,219.63	184.50	1,204.14	195.26	312.90
	6月	297.55	1,222.77	187.00	1,206.35	197.76	313.98
アメリカ	5月	35.98	387.75	0.64	314.59	53.34	56.43
	6月	36.87	387.75	0.64	314.59	53.34	57.32
アルゼンチン	5月	1.50	54.00	0.01	13.50	40.50	1.51
	6月	1.51	54.00	0.01	13.50	40.50	1.51
ブラジル	5月	7.97	129.00	1.20	76.50	55.00	6.67
	6月	7.97	129.00	1.20	76.50	55.00	6.67
EU	5月	7.48	64.30	20.00	79.50	5.00	7.28
	6月	7.08	64.30	22.50	81.50	5.00	7.38
日本	5月	1.40	0.01	15.50	15.50	0.00	1.42
	6月	1.40	0.01	15.50	15.50	0.00	1.42
中国	5月	205.32	280.00	23.00	304.00	0.02	204.30
	6月	205.32	280.00	23.00	304.00	0.02	204.30
ロシア	5月	1.01	16.30	0.05	11.90	4.20	1.26
	6月	0.91	16.30	0.05	11.90	4.20	1.16
ウクライナ	5月	1.39	22.00	0.00	5.50	16.50	1.39
	6月	1.39	24.50	0.00	5.50	19.00	1.39

世界の大豆需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	5月	101.04	410.59	169.77	386.49	172.41	122.50
	6月	101.32	410.70	169.82	386.09	172.41	123.34
アメリカ	5月	5.86	122.74	0.54	66.29	53.75	9.11
	6月	6.27	122.74	0.54	66.29	53.75	9.52
アルゼンチン	5月	18.15	48.00	5.70	43.20	4.60	24.05
	6月	17.55	48.00	5.70	42.70	4.60	23.95
ブラジル	5月	33.10	163.00	0.45	59.70	96.50	40.35
	6月	33.55	163.00	0.45	59.70	96.50	40.80
中国	5月	35.80	20.50	100.00	118.00	0.10	38.20
	6月	35.80	20.50	100.00	118.00	0.10	38.20
EU	5月	1.48	3.10	14.00	16.74	0.30	1.54
	6月	1.61	3.22	14.00	16.74	0.30	1.78

世界の小麦需給							
		期首在庫	生産量	輸入量	国内計	輸出量	期末在庫量
世界計	5月	266.28	789.76	207.54	791.70	209.72	264.34
	6月	266.66	800.19	209.54	796.14	212.62	270.71
アメリカ	5月	16.28	45.16	3.67	30.26	19.73	15.12
	6月	16.28	45.32	3.67	30.26	19.73	15.28
アルゼンチン	5月	2.53	19.50	0.01	6.50	13.50	2.04
	6月	2.93	19.50	0.01	6.60	13.50	2.34
オーストラリア	5月	3.15	29.00	0.20	8.00	21.00	3.35
	6月	3.15	29.00	0.20	8.00	21.00	3.35
カナダ	5月	2.54	37.00	0.60	9.60	27.50	3.04
	6月	2.54	37.00	0.60	9.60	27.50	3.04
EU	5月	16.16	139.00	7.00	109.50	38.00	14.66
	6月	16.66	140.50	7.00	109.50	38.50	16.16
中国	5月	139.08	140.00	10.50	149.00	0.90	139.68
	6月	139.58	140.00	12.00	151.00	0.90	139.68
インド	5月	9.50	110.00	0.10	107.60	0.50	11.50
	6月	9.50	113.50	0.10	108.10	1.00	14.00
ロシア	5月	17.64	81.50	0.30	41.00	45.50	12.94
	6月	17.64	85.00	0.30	42.00	46.50	14.44
ウクライナ	5月	2.24	16.50	0.06	7.10	10.00	1.70
	6月	1.73	17.50	0.06	7.10	10.50	1.69

脚注１：粗粒穀物はとうもろこし、マイロ、大麦、燕麦、ライ麦等の計で約８０％がとうもろこしである。
脚注２：年度は穀物年度。地域・作物により異なる。例：アメリカ産とうもろこし、大豆：９月～8月。

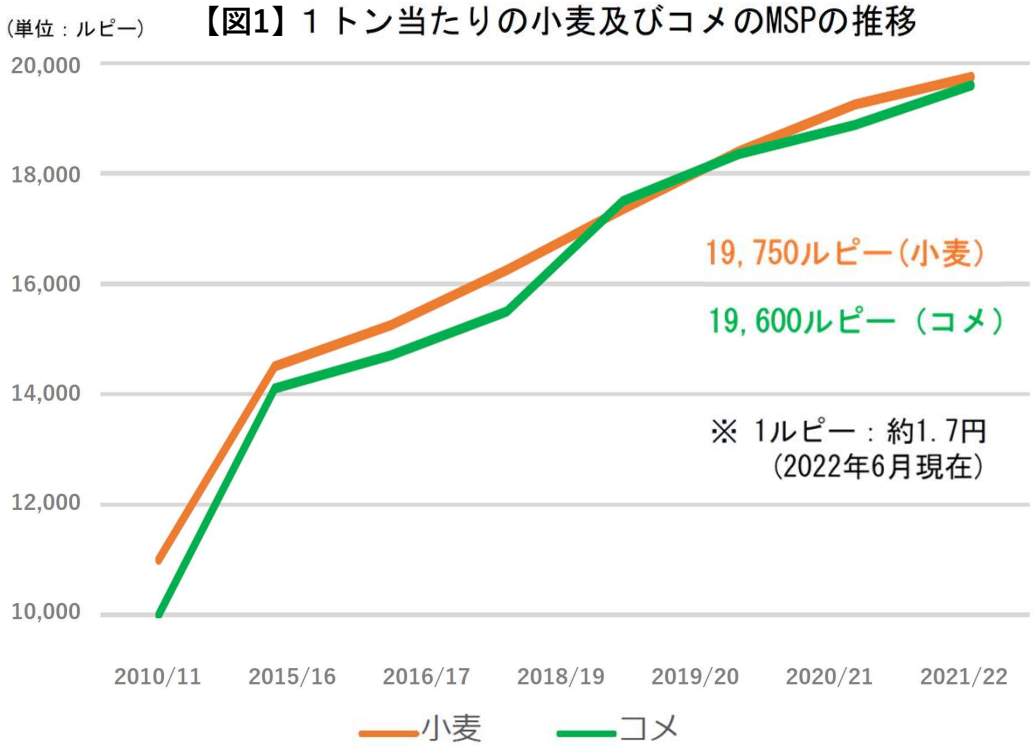
世界主要国の農業と穀物需給の行方…インド(3)

❶ インド社会における農業/農村の前近代性と困窮はインド政府にとって極めて大きな政策的課題である。その背景は、総人口14億人の約6割が農村人口と膨大、且つ農業労働人口は2.6億人と全体の55%を占めているが、農家所得は非農家の1/3と劣悪、後継者不足、耕作放棄地の増大、自殺者の増加(95-2015の20 年間で約30万人)、識字率3割、劣後した生産性、複雑な流通システムと中間業者搾取…とその問題を挙げればきりがない。その中で今年4月総選挙前の世論調査によるモディ政権の課題として「雇用創出」40%「農民の困窮」22%とまさに農業/農村問題に関係した課題が6割以上を占めたのは、如何にこの問題が根深く深刻なものであるかを物語っている。

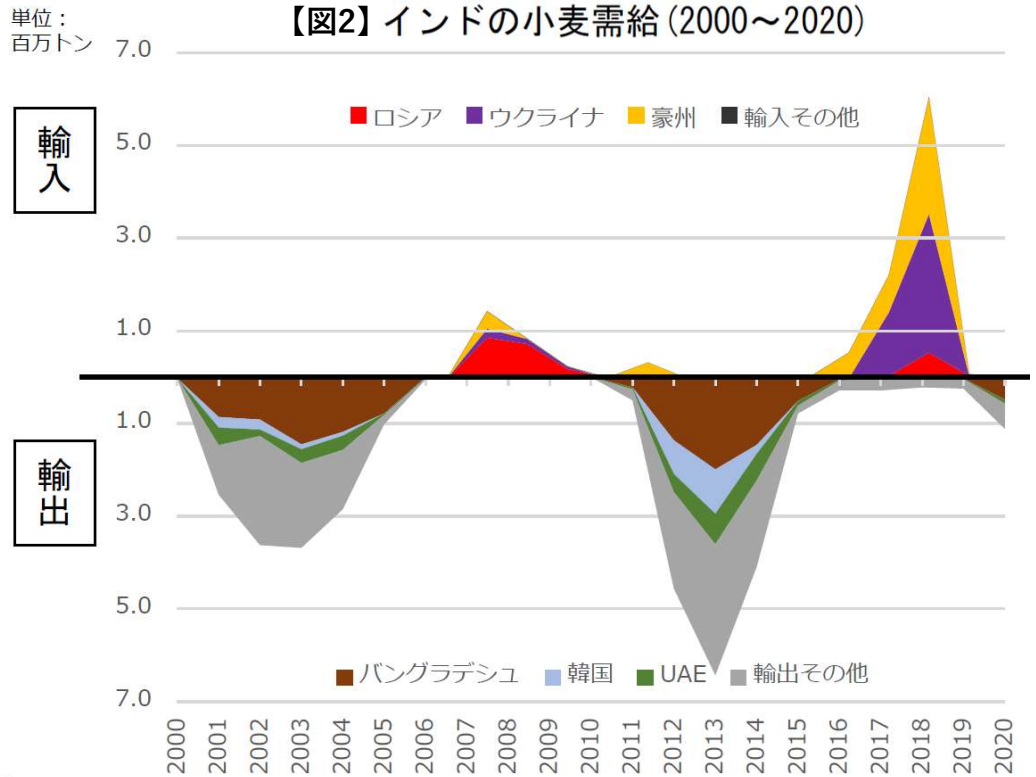
❷ その意味で、インドはどの政権であっても農業政策は政権維持と国内安定のため不可欠であり、政府は農家の安定収入のため「最低支持価格」MSP:Minimum Support Priceで買入、消費者に対しては「公的分配制度」PDS:Public Distribution Systemによる販売をその政策の基軸にしている。MSPの対象品目は小麦/米/砂糖キビ/綿花などの23種農産物で買上量の上限はなし、買取価格は年々上昇し続け[図1]の通り小麦と米は2020年以降の11年で約2倍(1万⇒約2万ルピー/ﾄﾝ)に急上昇。PDSは政府がMSPで買入した穀物を低価格(逆ザヤ)で販売するシステムで所得に応じ価格設定は3段階。この小麦/米の政府買入総額は概算8兆円(2.4億ﾄﾝ×19.7千R×1.7円)、逆ザヤ負担は年間GDP(22年＄3.4兆)の約1%弱(4兆円)と推定されその財政負担は極めて重いと同時に、農家粗収入は1ha規模で僅か11万円程度(3.2ﾄﾝ×19.7千R×1.7円)と低水準のままである。

❸ 上記の価格政策の他に、インド政府は●肥料補助金(肥料会社が農家に安く販売する代わりに製造原価＋αを補助)●灌漑補助金(州政府が負担したコストを補助)●電力補助金(農家に農業用電力を低価格提供した配電会社に一定額補助)等の農業分野に対する各種補助制度があり、政府の財政負担は❷同様GDP の約1%程度と巨額であり、両方合計8兆円前後の負担と推測される。因みにこれはインドの国家予算22年度39.4兆ルピー(＄5,280億)約68兆円に対し11.8 %と大きな負担であり国家財政運営上の課題と言われている。

❹ インド2大穀物のうち、コメは自給を達成し海外に年間2千万ﾄﾝ前後輸出しているのに対し[図2]に示す通り小麦の需給の変動は大きく年度ごとに不足時には輸入し、余剰時には輸出することを繰り返している。2011年インドは輸出禁輸措置を解除し輸出を再開したが、これはインドの生産力が向上した訳でもなく、上記MSP引き上げに伴いPDS在庫が積み上がり捌ききれない分が国際市場に流出しているという見方が強い。また、2016年には世界的な小麦需給ひっ迫の中で輸入に転じ18年には輸入量が約6百万ﾄﾝまで拡大し現在に至っている。インドにとって穀物生産の課題は構造的に見て極めて厳しいものがあるが、今後の展開が世界穀物需給関係にどう影響していくのかが大きな注目点である。(続く)



出典：米国農務省(USDA) 2022インドレポート



出典：
Global Trade Atlas